こぶし

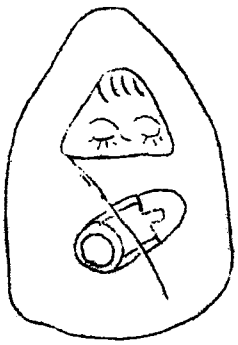
No.1

感じ

雑感	石平 則子	15
白馬岳に登って	山田 光男	16
雑感	岩野	17
山登り雑感	Y・K生	17
雑感	小松 広子	18
そこに自然があるから	上野 光子	19
白馬岳に登って	平田 園枝	20
白馬岳の魅力		
白馬岳への追想	不留川 彰	21
白馬	佐藤 茂	23

常山運動とこぶし山の会	嶋田[illegible]玉[illegible]	1
私の山感	古木 博明	3
米山登山	池田 洋子	4
妙高連峰縦走	大島 美昭	5
谷川岳断念	松岡 健一	8
谷川岳にて	たまに山に行く？ 22才の男	
雑感	入村 晶子	11
足ならしにて	金子 よし子	12
権現・ほこが岳	池田 洋子	13

山行記録　杉本　敏宏　25
妙高山登山　清水　精一　29
37才の火打　桑原　巌　29
鹿島槍～爺ヶ岳縦走　小倉　泰治　31
詩　自分　T・O　32
葉ヶ岳、常念　槍ヶ岳　縦走　木島　忠彦　33
花言葉　37
詩　山に想う　芳沢　喜久男　38
山の唄（青春牧場、いつかある日、岳人のうた）　39
一年間の山行記録　41
山歩き用語　43
山小屋生活の知恵　45
追伸　46
白馬登山に参加して
あとがき



労山運動とこぶし山の会

嶋田五郎

労山（日本勤労者山岳連盟）は一九六〇年五月に東京で勤労者山岳会として発足し、一九六三年に日本勤労者山岳連盟として全国組織が結成され、さらに一九六五年には第二回総会と第一回全国勤労者登山祭典が上高地で開かれ、実質的な全国的組織活動が展開され今日の大きな組織へと発展してきました。

一九六〇年といえば、歴史的な安保闘争で日本中がゆれ動いていた時でした。

一方高度経済成長政策のもとで「合理化」労働強化がすすめられ、労働者の健康の破壊が進み、登山界のなかには、社会生活から逃避する気持ちで入山したり、記録だけを追うものなど、さまざまな誤った登山観がありました。山の遭難も大きな社会問題となっていました。勤労者山岳会の発会式では、こうした社会的な背景などが遭難の遠因になっていることを指摘し、「登山は勤労者の健康を増進し、生活文化を豊にする為のものでなくてはならない。そのために社会のいろいろな事がらと有機的なつながりを持って正しく発展して行くものでなければならない（趣意書）」として「安く楽しく安全な登山」のスローガンをかかげました。

このように労山運動は、単なる思いつきや、偶然に生まれたわけではなかったのでした。

私達の地域でも登山人口がふえる一方ですが、まだまだ多くの人達は、山へ行きたくてもなかなか気軽に山に登れない、費用の面、休暇もなかなかとれない等。

一九六八年に労山第五回総会が三月に開かれ、すべての県に労山を作る方針が出され私達も労山運動の趣旨を受けとめ、すべての働くものが気軽に入会できる「安く楽しくより安全に」登山する組織を作ろうと準備をし、高田、直江津にそれぞれ勤労者山岳会が結成さ

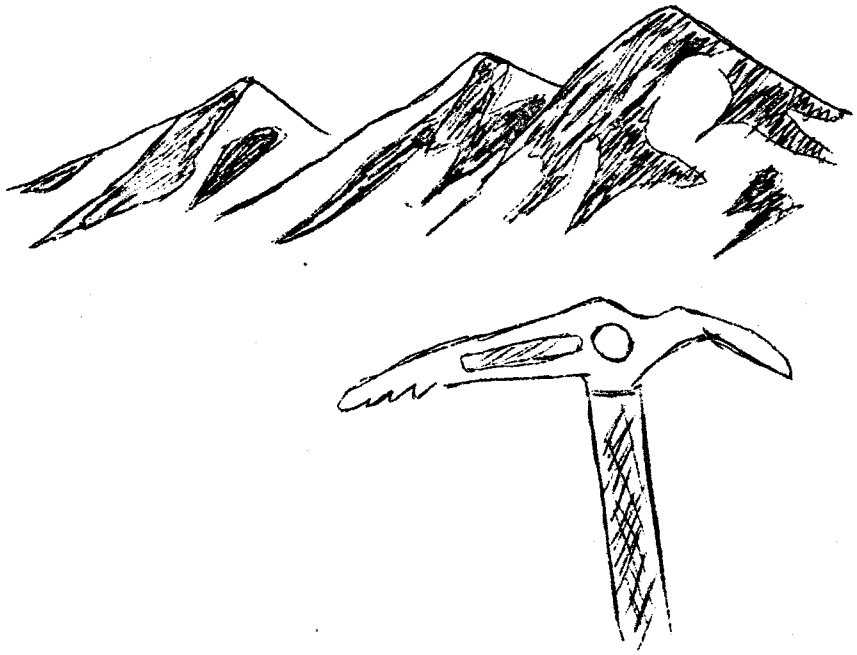
れ、さらに県段階では、一九六九年秋に、新潟県勤労者山岳連盟が結成されました。

その後高田、直江津の労山は一応の活動をつづけ会員も一定数増え発展をしましたが、一九七〇年～一九七一年にかけて会員の転勤、例会の定期化等が不充分で活動が停滞しました。高田と直江津の合併による上越市の発足を期に高田、直江津労山が合同の会議をもち組織整備の方針のもとに合併し「こぶし山の会」として発足しました。

昨年から活動が定着し、毎月一回の例会、山行、その間に穂高、雨飾と二回の大衆山行を行い一定の成果を得ました。

今年は会員をふやし、労山全国総会の方針である五〇万の組織に見あった会員へ着実に前進し、名実ともにこの地域で技術的にも勤労者の山岳会としての社会的責任を立派に果たせる山岳会にみんなで一丸となりがんばり奮斗しましょう。

最後に自然保護運動の先頭にたち、当面ゴ高有料道路の建設に反対し自然を守るために県内の民主団体と協力し運動を進めましょう。



私の山感

古木 博明

私が山に登り始めてからまだ日は浅い。頂上を目前にしての最後の登りの苦しさ！二度と山なんか！絶対なんて事を考えて登った山道を下りの時には、こんどはいつこれるかな？春の残雪の時か！秋の紅葉の時にしようか……。

秋の山へ行く時間は限られている。そのわずかな時間の中でどれだけ山に行けるか、そのわずかな時間の中であえぐ、わずかな時間を山に向ける。時間さえあれば〈〈なんて事を考え地図を広げる。ガイドブックを出す。日帰りコースを一生けんめい探す。

正月休みは……お盆休みは……有給は幾何日使えるか、心だけは頭だけは山々を駆け巡る。実際登っている時よりプランを考えている時の方が楽しいけれど知らない。行きたい山がいろいろある。来年になれば又一つ増えると思う……。サラリーマンは時間と金が無い！

これは私だけかも知れないが……何んとかならないものだろうか。

私が山に登り始めた原因はこれといって別に無い。たとえて上るなら、一つは健康の為と言えると思う。自分の廻りに運動する場所が無かったという事でもない。山に登り始める前の私には自分の時間というものが無かったと言っても過言では無いと言えるだろう。

それに対しての挑戦であったかも知れない。けっこう山に行く機会の多くなった今の私しにはもう分らない。

今の私しには今の調子でいつまで山へ行けるかという事だ。いずれはこんなに気ままに山へは行ってられない時が必ず来るだろう。

それまでに十分満足できるだけ山へ行こう。何か自分にも分らないものを見つけるまで……。

米山登山

池田 孝子

八月二八日　単独登山

前々から、米山に登ってみたいと思いながら今まで機会を得る事ができず、小さな子供でも登れる山だとはいえども、私にとって単独は始めてなので、とても不安だったが、お天気も良かったので、はりきって家を出た。

汽車で柿崎駅に着いた。米山寺行のバスが少ないので一時間半程待って、登山姿の親子連れと共にバスに乗り込む。米山登山口で下車し、坂を登りつめると学校があり、ここからが本格的な登りである。天気に恵まれ、夏の暑い日であったので、汗をかきかき登り始め少し歩いたところ、長いものが道のまん中に横たわっているのが、私の目の前にあらわれた。　寒けと共に体中から血のけがなくなって今来た道を逃げ帰ってしまい、先程の意力はなくなり、帰ろうか帰るまいか迷ってしまった。でもここで退散してしまってわと、思い直し、一メートル位の枯木を捜し出し、草を鞭打って歩く。

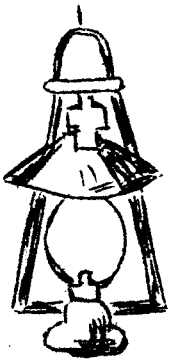
虫の音や、鳥び出して来る音にドッキリとしたり緊張の連続である。

反対の山々には、一段と高く妙高、火打がそびえている。先程一緒にバスに乗った親子連れも登って来られ、後になったり、先になったりしながら頂上に着く。

頂上からの展望は、少しガスがかかっていたが、海の青さが目について離れない。

山に来て、海がこんなに近くに見られるのは米山くらいだろう。

下山は大平のルートを取り、米山駅から帰路に着く。



妙高連峰縦走

大島　美昭

東より妙高山、火打山、焼山、金山、雨飾山と並ぶ妙高連峰。この峰々を縦走したいと思い始めたのは、初めて雨飾に登った時ひらだ。　秋のある日、その願望をかなえる時がやって来た。

朝六時、終業のベルが鳴る。昨日までのくもり空はどこへ行ってしまったかと思う様な良い天気だ。さあ！絶好の登山日和だぞ。

山口着、午前九時。橋の上で準備を整え腰を上げる。おや？猫の耳が見えるぞ。遠った雨飾の頂上だ。海谷の山々も見える。さあ、長い〜アプローチの出発だ。第一番目の山は、美しいお花畑と梶山新湯の古びた山小屋で知られている糸魚川の秘境、雨飾だ。

梶山へ着くまでに雨飾の代名詞の一つである蛇にも度々あいさつをかわして行く。

梶山より上ではまむしも出るんだったっけ。

梶山からは東海原という牧場の様に広い草原、水のおいしい冷清水を通って梶山新湯へ、と向う。

一人で歩いていると昨年会社の山仲間と来た事が次から次へと頭の中を横切って行く。

今でもみんな山登りを続けているのかな。

「山登りって素晴だね」なんていいながら、今では山登りをやっていないらしい彼女、又いっしょに登ろうよ。

黒光りのする柱、ランプの灯の下でおそくまで語り合った夜。そんな山小屋での事を思い出しながら新湯へと到着する。

あれ〜すっかり変っちゃっているよ。皆なが見たらがっかりするだろうな。これじゃまるで別荘じゃないか、電灯線まで引っ張ってあるよ。作りかえることは知っていたが、これじゃ雨飾の魅力を半分以下にしてしまった様なものじゃないか。

長い〜アプローチもここで終り。新湯からはしばらく急登が続く。難所のぞき、ここからは尾根道だから楽なはずなのに、眠ってないせ

いか非常に体にこたえる。
中の池、水たまりの様な所、エンレイ草がとても印象的だった所、ここで尾根が終り急登が始まる所。さあ！もう一息だ、がんばらなくっちゃ。あ熊笹だ！やっとついたぞ、もうすこしで休めるぞ。
雨飾山頂午後三時、まわりを見わたしてもだれもいない。いままでにぎやかだった所が急に静かになった、そんな感じがする。
ここで野営にしようか？そうすればこの前にできなった事ができる。熊笹の上に寝ころぶことが出来る。夜空の星をみながら歌を唄うことだってできる。でも明日がつらくなる。
今日のうちに時間をかせいでおこう。あれ、もう四時じゃないか。早く出発しなくっちゃ。三〇分位下ったころ道が平になる。清水が流れ出ている。高谷池までは水場がないだろうな。そんな感じがする。
さあ、出発だ。それにしても悪い道だなあ。秋の陽は落ちるのが早い。周りは暗くなりはじめるし、竹やぶで囲りの感じがわからないし、道を見つけるのがやっとだ。でも金山までは行きたいな。そんなあせりの為か時間をみるのもおっくうになる。もう道を見つけるのも困難だ、でも金山はまだかな、いったいどこら辺まで来たんだろうな？
今日はここらへんで野営にしよう。いったい何時になったのだろうかなと、時計を見るとまだ六時半だ。夏なゴばもっと時間をかせげるのにな。平な場所を見つけ、簡単な夜食を済ませミュラフにもぐり込む。雨が降らない事を願いながら眠りの世界へと引きこまれて行く。午前二時、笹の葉の音で目をさます。雨だろうか？あれ、月が出てるや。よかった。それから五時半まで又眠りこむ。
午前六時五〇分野営地出発。霧が笹の葉につきまるで小雨の中を歩いている様なものだ。途中視界のきく所で後を振り返ると雲海の中に後立山連峰が浮かびあがっている。雨飾の

ふとんびしもはっきりと見える。しばらくその美しさにみとれるが、又霧の中へと足をふみ入れる。突然、視界が開け妙高、火打の山々が視界の中に飛びこんできた。金山だ。歩き初めてわずか一時間だ。さあ、これからはどこら辺を歩いているのだろうなんて心配せずに歩けるぞ。裏金山、富士見峠、石ゥ岩と快調に足を進める。ちょっと中をみて行こうかなてあれ以外ときたないんだなあ。もっときちんとして帰ればいいのにな。さあ、これからはきつい登りだぞ。でも、やっぱり緑の中を登るのって楽しいな。

焼にはくさり場があるっていうことだけど、どこにあるんだろう。登りはよいけど、下りにはやっぱりくさりがあった方がよいようだネ。山頂の水たまりの色って白根山のお釜の色に似ていて気味が悪いな。

焼からの急な下り、眺めけからも火打までのなだらかな登り、なんど休みたいと思った事だろう。火打山頂に着いた時には、なぜか終ったという様な気持ちがこみあげてきた。

火打から高谷池、高谷池から黒沢池までの道ってこんなに楽だなんて思ってもみなかった。黒沢ヒュッテでは、長野県の人と夜遅くまで話したっけ。黒沢ヒュッテからはもう自分の庭みたいなものだ。下りなれた道を今日は登って行く。妙高山頂でのながめ。やっぱり昨日と同じように、雲海があり、山並みがきれいだ。ツバメ温泉着、午前一一時三五分、一足ちがいでバスは出発。そんな気持ちを察するかの様に雨が降り出す。結局昨日高谷池からずっと一緒に来た女の子、4人のグループと一緒にタクシーで駅へ行くことになった。

この山旅の後半をちょっぴり楽しくしてくれた彼女達にさようならを言い汽車に乗り込む。今回の縦走は、紅葉にはちょっぴり早かった時なので、ただ行って来たということだけだったが、次に行く時には、七月の後半の九の時期に、気ままに写真を写しながら行きたい。

END

谷川岳 断念

松岡 健一

谷川岳へ行ったのが五年前の八月であった。なにせすでに遠い昔のことで記憶力に乏しい。自分にとって当時を思い出すのに己れの脳細胞がこの為に使うだけ使い果したといえるだろう。八月一六日御盆休みで一人この山に向った。谷川岳と聞くとすぐ誰れでもあの厳しくそそり立つ岩場による悲惨な事故を想像する。本格的岩登りをする山男にとってその場所は何よりも彼らを魅了する所である。しかし一般登路はちゃんとある。その一つに西黒尾根を自分は選んだ。ところが適切な列車時刻を検討せずこの為登山口天神平まで行くのに予定の二時間も口ロスしてしまいここ数者は午後の一時であった。どこの山でもあるが午後からの入山はいかなる場合に於いてもさらに山を愛する者であれば慎しまねばならないのが山の鉄則であり基本的行動であろう。これに反して行動を取る者は結果的にどんな事故が身におとずれたともいた仕方がないであろう。自分もこの今現在この基本的行動から踏みはずした試である。入山後約二時間慌雪小屋跡手前で雨にあてられ空しく退去せずにはいられなくなった。実は心中早く天候が悪くなってくれぬかと真く不届千万なるいい加減な願いを深い木々から見えぬ空に頼んでいたのだった。だからこの雨で自分でも驚く程思い切り良く下ったのだった。お陰で記念になる大切な登山帽をズボンの後ポケットより落としてしまった。昼間あの天神平ケーブル発着駅付近のにぎわいもすでになくあの人混みも嘘の様であった。あたりはすでに夕闇が迫りただ静かにたなびく小づえのささやきとススキの穂波だけが目に写った。途中右手下に見えた土合の駅を走り抜けた列車の音がその静けさのさまず様な響き渡る音が自然に合わない不協和音を残して通り過ぎるのだった。駅の構内のライトが一つ二つとつき始めた。この上越線が開通して間もなく

この地を訪れる山男が急増した。そして事故も万全なる装備と充分なる訓練と技術にもかかわらずまるでその地で命を失うのを競うかの様に増えたのだ。そこにあった石碑にはむなしくも此の山に尊い命を落した約五〇〇名がぎっしりと刻み込まれてあった。あの昼二枚分位しかない石版の表面に肉眼でも読みとれぬ程数多い人命が消えてしまった事に気味悪い程薄寒である地に対し強い恐怖感におそわれ、なぜか後からえり首でもつかまれるのではないかと後を振り返り〈〈 早めに下ったのだった。つまりこの計画は断念すべき当然の成り行きの行動だった。またいつか登れる機会を是非得たいものと思っているのだが。

谷川岳にて

たまに山に行く
22才の男

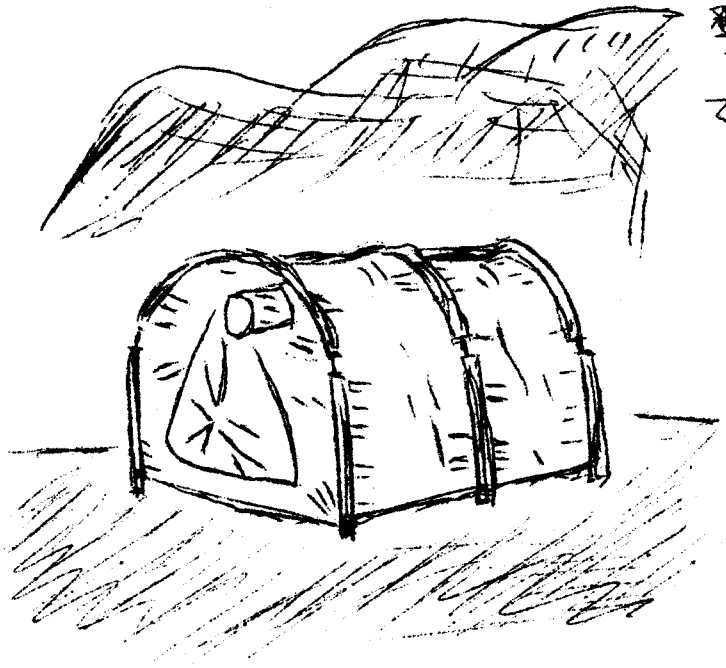
二〇〇〇m級の山でアルプス的山模を背つ谷川連峰・一回目は雨に行った。西黒尾根から登りがニゴー新道を降りた。紅葉の谷川岳は黒い岩肌と対象的な美しさが俺の山意きをかり立てた。そして今冬の西黒尾根を登っている。白一色の世界そして黒い岩肌・・・・早朝の水上駅、駅員いわくこの冬一番のひえこみだそうだ。二枚しか着ていない俺には骨までひえる。今日一日の晴天を約束するような満天の星空だ・水上から二駅うつり〈〈しているともう土合についた。四百数十段の通路を通って駅から出た。まだ暗い。道路のザラメ雪が足に気持ち良い。茶店のグラニュー糖の様な感じだ。西口の登り口を通しこしてマチガイの出合まで来てしまった。昨日の事と言い、今日の事と言い気をつけなければ・・・・ 登り口までもどって約一時間、アイゼンその他全部を着って出発。

鉄とうまで二五分、アイゼンの使用は初めてなので足の運びがスムーズに行かない。鉄とうの所でヘッドランプをしまい込む。森林限界の手前で朝食にする。

降りて来たあとの道は登りずらい。いきせき切って山頂をふむ。谷川連峰、笠ヶ岳、その山々が目の前に広がる。山頂からの斜面に広がるミヨカブラ〜〜〜、一の倉沢をのぞいてから昼食にする。帰りはガンゴーよりマチガ沢へおりる。ミリセードで一気に沢の下まで降りる。デブリが気にかかる。なだれがおきるのを心配しながら後をみながらあるく。いつのまにかマチガ沢の出合についてしまった。山頂より一時間三〇分でマチガ沢の水がのどに入ると、ビールよりうまい。

三の分で土合の駅。又来たい山だ。

登りの時は、なんで山なんかに来たのかと考える。もう二度とこんな苦しい目に合いたくないと思いながら山頂に立ち、山を下る時又来よう、こんどはこの自然の美しさこの冬のきびしさ。顔から流れる汗のかんしょくをもっと多くの仲間に感じさせたいと思うのである。かけがいの無い自然を我々は守らねばならない。いつまでもいつまでも、この美しい自然を大切にしたいものだ。一日に谷川を登って。



来よう、こんどはこの自然の美しさこの冬の

雑感

入村昌子

暑かった夏もいつの間にか過ぎ、静かな秋の季節になってしまいました。山はこれからが、ほこらげに、美くしく、鮮やかに衣変えをするのでしょう。

秋の澄んだ空気の中で妙高山がくっきりと見ることができる日は、私は忘れられないある出来事を思い出すのです。

私が中学生の頃に熊ごろう先生と呼ばれていた山の好きな先生がおられました。山の好きな人ならこんな気持ちがわかると思うのですが、下界に長くいると無性に山へ行きたくなって、先生いわく―いつもの病気がまたおこった。―といって時折山へ出かけて行ってしまうのです。穏やかな感じの先生で私も山が好きなことから本をお借りしたり山の話を聞かせていただいたりしたこともありました。その熊ごろう先生が突然、本当に突然他界されてしまったのです。その日は肌寒い日で、妙高山に、初雪が下りた日でした。

あれからもう二年もたってしまいましたが、その後、私はこぶし山の会に入会させていただいて、足手まといになりながら、あちこちと山へ連れていってもらっています。山を通していろ〳〵な事を考え、又楽しい時をすごし、たくさんのさまざまな人と接触することができました。

先生とは山について語り合ったこともありませんでしたが、それだけにそのことが悔やまれます。先生がもくなられた次の日は、その秋一番の秋晴れのようにスッキリ空が澄んでいました。その中で妙高山がくっきり浮かびあがり、また先生が生前最後に登った山が、妙高山だったことを思うにつけ、高田から見える頸城の山は、私にとって忘れることのできないものなのです。

先生の形見となってしまった、日本百名山もいつも机の上に置いてありますが、この本が飾りになってしまわないよう、いつかこの

百山を踏むことが私のささやかな夢となっています。そして、先生の分も、もっと〳〵歩かなければ・・・・とも思っているのです。今年も妙高に初雪が降る日は、そう遠くはないでしょう。

ひとならしにて

金子　よし子

七月の台風の過ぎ去ったある日、前々から計画されていた奥穂高へ行く為の足ならし、（車で言うならウオーミングアップかしら）が、燕から長助平由笹ケ峯コースで行なわれた。なにしろ前日まで台風で荒れていたので、参加者が男性三人、女性二人を含む小パーティーでしたが、前日の嵐とは裏はらに、一つない青空。適当に風がそよ〳〵吹く絶好の登山日和でした。

燕から小金清水までの登り道とてもきつく、今にでもバテそう。ここでノゼてはダメ。行けないと登って行く内に、なだらかな所へ出てホッと一息。足元を見ると小さな水芭蕉が、かわいいく咲いて、ここからは長助なのだ。長助の池は、前々から水芭蕉がたくさん咲くと聞かされておりましたが、うっかりしていれば今にも足で踏んでしまいそうな小さな水芭蕉が、あたり一面に今を盛りと咲き

さな水芭蕉が、あたり一面に今を盛りと咲き

誘っていました。
ここで小休憩。水芭蕉の咲いている所で写真をと、湿地の中へ入っていったら、いきなり監視員の人にどやされ失敗の巻
お昼寝などをして、いざ出発！
私の嫌いな笹やぶを目指しての登りだと思っていたら、ここからは、竹の子がたくさん出ていると言うので、「勇気百倍」でなくて、「元気百倍」竹の子を取りながらの登山も、なかなかいいものです。
登りきると大倉乗越。ここからの妙高の美しさは、又格別で再認識しました。ここを下って行けば黒沢。
黒沢の池がこんなに広い湿地帯になっているとは、予想以上でした。湿地を歩いている時などは、ほんとうにハイキングみたい。
青い空に涼しい風、疲れなど一変に吹っ飛んでしまいそう。黒沢の川で小休憩、今にもねむくなりそう。とは言ってもこれから富士見平までの登りを思うとゲンナリ。

ほんの少しの登りと言っても、通った事がない道は長く感ずるものです。
富士見平から笹ケ峯までは下る一方。
空の様子がおかしくなって来たのでは。
疲れた足をひきずりながら笹ケ峯まで無事下山、と共に雨がたくさん降り始めた。
さすがお昼の後、登山者にはほとんど会いませんでした。
この足ならしで、竹の子がりのおもしろさを味わいました。
これが私の収穫かしら。

櫃現、鉾ヶ岳

池田洋子

期日　48・9・23日（金）
パーティ　杉本、芳沢、金子、池田
―柵口発（8:30）―櫃現着（11:15）発（12:00）―鉾ヶ岳着（13:45）発（14:00）―大沢岳―
昌道鉱泉着（16:20）

6時50分の汽車に乗る為、金子さんと直江津駅へ急いだ。定例なのでもっとたくさんの人が来ているかと思っていたが、杉本さんが一人待っていただけだった。発車ぎりぎりに汽車に乗り込む。芳沢さんが来て四人となる。順弘の影響か十分程遅れて発車。能駅からバスに乗り柵口という所で降りた。敬老の日だったせいかバスの中は老人会の人たちで一杯だった。柵口からは上部にガスのかかっている権現が見え、すぐに登れそうな気がした。川づたいにそって登り口に入る。人通りが少ないせいか、私の背丈程のブッシュの中をかきわけかきわけ進んだ。日はあたっていないのだが、むし暑くて汗が流れてくる。登っていくと鎖り場があり、久し振りだったので不安を覚えたところもあったが、程なく軽快に成ることができ、変化があっておもしろかった。腕力を使うのでうでがいたい。25メートルくらいの暗い岩の中を通った二れが胎内くぐりである。権現の近くになると、赤とんぼが群れをなして飛んでいる。

ガスがかかっているので先が見えず、一番高い所が権現だと思い、必死になって歩く、又手前に山がある、そんなことを何度となくくり返しながら登る。私のずっと前をいく、杉本さんの「着いたぞ」という声に励まされながらたどり着く。ここで昼食。東京から来たという単独の登山者と一緒になる。鉾ヶ岳までの登りは、わりと楽でアッというまに着いてしまった。ガスで視界は0。食料を補給したり記念写真をとる。雨にあわないようにと早めに腰を上げる。下山は大沢岳で2本に別れているので左のルートを下る。とても急である。途中雨に降られポンチョを着るが、大降りもせず島道鉱泉に着き、温泉にひたる。こうゆうれ行は最高。湯上りのビールで、ほろよい気分で島道のバス停へと急ぐ途中、私の大きらいなかみなりに会い、さんざんな目にあう。かみなりがなかったらとてもいい山行だったのになあ……？

が明けくれである。極理の近くになると、山行だったのになあ……？、

雑想

石平則子

「ナニィ〜!!　あれが頂上で、あそこまで登るってェ〜　信じられん」。などと朝の光で薄紅にそまった白馬を見上げてため息をついたのに――。人間のこの「アシ」ってのはたいしたものなんですねえ。日頃「徒歩」なんて見くびって電車や車にたより切っていたけど、これは、このダイコンアシも見なおさなきゃならないなあ――とつくづく思ったものです。

この登山の収穫はいっぱいあるんですけども本当にいっぱいで書ききれない位――。中でも憧れていた「オダマキソウ」との対面はもう、うれしくて内気そうに下を向いている紫の花とそれを支えている私の左手の記念写真は大事な宝物です。

雪渓に対する私の夢は無惨に壊われたけれど（思っていたのは真白で表面は乾いてサラサラしていて――などと無知をさらけ出す。）本物に自分の足も手も尻もみんな付けて満足。満足したけど「ブーッ」疲れました。筆者は当年18才ですけど体力の衰えを感じました。此からせっせと自主トレーニングにはげもうと思っています。次回に備えて。

しっかし、よく集ったものです。土曜の夜と日曜をかけて三千円ナリは実に手頃だったのです。山に登りたい人はいっぱい居るのに行けないっていうのは淋しいですね。お金も暇も、そうかも知れないけど、和私みたいな未経験で才向オンチは何よりも山の知識が無いし自分から「あの山へ登ろう！」と出かけられないのです。連れて行ってもらう登山では無くて、いっしょに登る――」というのは大切な心構えだと思います。いつかは「あの山へ」と一人リュックをかついで出る時も来るかも知れないから。

白馬岳に登って

山田光男

白馬になんの苦労もなく登頂して何か物足りなかった、だが夜行日帰りで登頂前日の夜はバスの中で心配した、という事は知っている仲間が全然いなかったからである。まあとにかくバスの最後列で軽い眠りについた。

朝四時頃もう目をさましたようである、人員点検、班編成でいよいよ歩きに入った、アルプスは初めてなのでじっくり足を進めようと班に合わせてなるべく余裕を見せずに登った、いくらか歩くと白馬はまだ見えなかったが雪渓の山々がくっきり浮かんでいる。天気も良好、気分もだんだんとスッキリして班にもなれていくようである、ようやく白馬尻に着き朝食をとる。いよいよ大雪渓をめざして登り始めた。我々の班のリーダーは特別リーダーで名前は忘れたが女性でなかなかたくましい男性に負けぬ位のリードぶり、安心してついて行けた、なにしろ雪渓は秋田の鳥海山以来の事、しかし雪渓登りは好きである。すばらしい登りながらも左、右と上を見渡しながら、ちょっと悪いと思ったが班をはずれて写真を撮らせてもらった、だが写真より登りながら自分の足でガッチリ雪を踏みながら登っている我々しか感じない美しいがある、なんとも言えない気分である雪渓をすぎお花畑に到着する時には相当つかれていたようで苦しかった。でもわけなく村営小屋につくそして頂上を目ざして、やはりこの行程は苦労した、もう高山植物で下界では絶対見れない花々そして山の景色、苦しんで登頂した者でしか味わえない、頂上はやはりすばらしい、四才八才見渡し言葉も出ない位感激の心、しばらく我を忘れて山の美しさに見入る。下を見下ろせばなにかすい込まれる様な感じである。毎日私の仕事上社会の裏ばかり見ている私、時々こういう気持になりたい事が相当ありますそして俺は生きているのだと再自確するのも山に登る者の特権かなあ!!

こんな事を考えながら下山した。

以来の事、しかし雪渓登りは好きである。す

こんな事を考えながら下山した。

雑感

岩野

今回の白馬登山で、はじめて山の頂上を極めることができました。今まで、霧雨に煙る中を寒さにがたがたいいながら登り、途中で降りてくるという経験しかありませんでした。ですから、青い空の下で、遠くに自分の目標を見ながら登り、頂上を極めた時は、ほんとうに感激してしまいました。お花畑、大雪渓など、見るものがなにもかも目新しく、いつもそっちの方に気をとられていたので、あっ、とも疲れを感じませんでした。

今まで、家庭と学校の間を往復しているだけで、わたしが知っている人といえば、近所の人と学校の人くらいでした。でも今回、いろんな職業、いろんな生活環境を持った、いろんな人と交わることができました。今まで話したことがないどころか、顔も見たことのない人と、年の違いも、職業の違いも、生活の違いも越えて、親しく話すことができました。こういうことは、町にいてはとても考えられない。山でなくてはのことだと思いました。今でも、山に行って来たんだなあという充実感でいっぱいです。これからもいろんな機会を利用して、いろんな山に登ってみたいと思っています。

山登り雑感

Y・K生

白馬岳2933メートル「ニクイサンザン」という高さで今回で三回目です。しかし、特にこの山は、大雪渓の雄大さ、人を寄せつけそうもないそそり立つ岩々、まさに男らしい雄姿である反面、新緑の中に映える可憐な小さい黄色の花々の女らしさ、この二つが紺碧の空と調和している景観、これぞ大自然そのものの印象が強い。スカッとすると同時に人間社会もそうありたいものです。そこに下界では、味わえぬ魅力があり苦しくとも又登る。登山とは、不思議な行動かもしれない。もう一つ不思議なことは、登山中、

初めての出会いでありながら何隔てなく挨拶を交すことである。価値感の相違、義利人情の欠如等の現在の社会環境の中にあって、現代に残された唯一の人間らしさを感ずる〝礼儀の場〟である　とは過言であろうか。永遠に大切にしたいものです。今後もチャンスを作り、登山をしいろいろな人と出会い、いろ〳〵な経験を積んでいきたいと考えます。

雑感

新大一年　小松広子

こぶし山の会のみなさん、それから白馬山行に御一緒したみなさんお元気ですか。あの時は、程んど知らない方ばかりでしたがいろんな職業、いろんな年代の方と、楽しく登ることができて、本当に喜こんでおります。山に登る仲間がいるというのは、いいことですね。頂上へ着くと、ここまで来れたのはみんなで登ってきたからなんだ、一人ではとても来れなかったと、いつも思います。山を通じて生まれた連帯感というか、仲間意識みたいなもの、大切にしていきたいですね。でもある人は山を本当に楽しむのなら、単独登山が一番だと言います。集団で登るのも、単独で登るのも、それぞれ違ったよさがあるので一概に、こういうことは言えないでしょう。でもわかるような気もします。わたしは単独登山をしたことがありませんが、どんな形の登山でも、無心になれる時間があるということは共通しているのではないでしょうか。苦しい苦しいと思いながら歩いていても、それを通り越すともう、頭の中はからっぽです。ただ足だけが機械的に動いているだけです。あとで考えてみて、私にはこういう無心の時間が最も良かったように思えるのです。頭の中にあるいろんなものをすべて排斥して空の状態になれる時間なんてなかなかありません。わたしは、こうゆう時間がほしくて山に登るのかもしれません。

みんなで登ってきたからなんだ、一人では

んでもたなかあります　わたしは　こうい
う時間がほしくて山に登るのかもしれません。

そこに自然があるから

上野光子

「こぶし山の会の皆さん、自然とはあんなに美しいものですか。」

かねてから、白馬岳に登りたいと二十年来思い続けていた。計らずもその機会に恵まれたことを感謝している。友人のパンフレットを見て即座に決めてしまった。しばらくして冷静に考えてみると、果して体力があるのだろうか。もし遭難したら家族はどうなるだろう。周りのことも省みず決めた軽薄さにあきれた次第。しかし、山登りは一年早ければ早い程よいに決まっている。己の体力を試すためにも又努力のすえ勝ち得た何にもかえがたいものが得られるなら多少の危険をおかしても。ご主人様にやんわり伺いをたてれば、妻が思う程心配もせず、それ程私を必要としないのなら、こっちもこっち気軽に行こうと心に決める。そして縄とびでの特訓開始。

「おかあさん今一〇〇回、あと二〇回がんばって。」迷コーチャーの指導よろしくみごと登頂に成功。雪渓からの涼風。切り立った杓子岳の雄大さいや何よりもすばらしいあの空の色。自然が絵の色を真似たのか、絵が自然の色を真似たのか。日本にもあんなすばらしい自然の色があるとは。人工色に慣らされている現代人にとって、正に驚異であり、はずかしながら信じられない空の色であった。今でもくっきりと脳裏にきざまれている。たぶん七十、八十のおばあさんになっても忘れないであろう。この色を我がいとし子、いや日本中の子供に見せてやりたい。そして自然のすばらしさ、自然の大切さの芽を育てさせてやりたい。一寸待てよ、子供達より先に味わってもらわねばならない人がいたはず、そうだ、世の開発者かな、国のおえら方が先かな。私は登るそこに自然があるから。

白馬岳に登って

平田園校

私は「こぶしの会」による登山にはじめて参加した一人です。学校を離れての登山はこれが生まれて初めてでした。猿倉から白馬尻までの道のりは、本当に長く感じました。これくらいで妙高登山のように思い、私は疲れに疲れてしまいました。他の人はみんなピンピンしているものだから「アリナミンを一瓶飲んできたんじゃないかしら」と本当に思ったくらいです。ひとまず昼ごはん、いやあれは朝食だったはずです。今考えると下界と白馬尻では五時間近くの時差があるように思えます。朝食を食べると急にポパイのように力が出て元気になってきました。「冷たーい水」「山へきたんだ」と言う実感。私は全然疲れない人ですよと言うような顔で又、登り始めます。でも直に疲れが出て来ます。少し休み元気が出る、登り始め疲れる、少し休み元気が出る登り始める疲れる。ほんとうにこの繰り返しのようなものです。でも初めて雪渓を踏みしめた時は、「私は今白馬を登っているんだ」という、うれしさは隠しきれませんでした。すごく急な雪渓を登るのは、「ヒマラヤを登る勇敢な女」などを想像させるには絶好なものです。足がふらふらしてしまい重い荷物を持っていた方が楽な様に感じました。私の前へ行く小柄な人も、「よいしょ、よいしょ」私もから元気を出して「よいしょ、よいしょ」です。ちょっと石を踏みはずすと、「だいじょうぶ？」「はい」これが何度となく続くうちに、お花畑、まだ満開ではなかったけれど、キンポーゲだろうか、黄色がいやに目に残る。そして頂上が見える最後の力本当に一生懸命登った。「頂上だ」うれしい本当に来て良かったとつくづく感じました。今私はこの足で白馬の山頂にいる。本当にいる。なごりおしい白馬岳を下山した時は、もう来年の山の楽しみに変っていました。

でも直に疲れが出て来ます。少し休み元気が出る、登り始め疲れる、少し休み元気が出る

白馬岳の魅力

北アルプスで人気のある白馬岳この山の魅力はなんといっても大雪渓とお花畑であろう。白馬大雪渓は剣ノ木、剣沢と共に日本三大雪渓の一つに数えられている。大雪渓は長さ約2キロもあり、ちょっぴりスリルのある雪上登山を楽しませてくれる。お花畑は、小雪渓を通りすぎるとすぐである。7月から8月の最盛期には赤や黄色の花が咲き登山者の目を楽しませてくれる。高山植物の宝庫、お花畑は白馬岳のハイライトともいえるだろう。又、北アルプスの女王、高山植物の女王ともいわれるコマクサも見ることができる。

白馬岳への追想

不留川　彰

待望の上越こぶし山の会の機関紙創刊号がいよいよ十月に発刊されるとのこと、何よりの快挙と心からお喜び申し上げます。

る。なごりおしい白馬岳を下山した時は、もう来年の山の楽しみに変っていました。

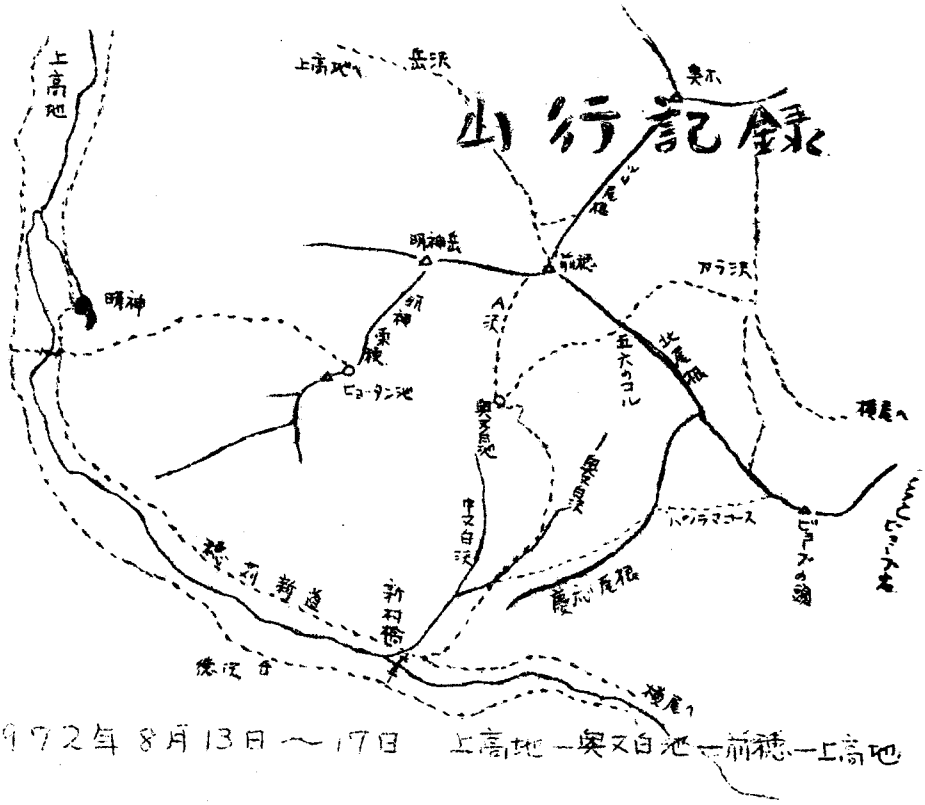
私が最初に山に登ったのは中学の三年か四年の頃一級上の友人と二人だけで夏休みに一週間分の食糧を持って、日が暮れたらそこで野営するという至極悠長な山歩きだった。上信国境四阿山の中腹、一面にひろがる熊笹の中に枯　山水のような川床での野営、熊が出るところなので夜通しテントの前で焚火をするため交代で起きていたこと。夜が更けるにつれ時々熊笹を渡る不気味な風の音に肌が粟立つ心細さ、ひとり焚火の番をしながら何を考えていたのか今思い出せないが、星空がとてもきれいだったこと、夜明のほっとしたうれしさは今でも忘れられない。前日[illegible]山麓で見た時はそれ程高いとも感じなかった山、今自分の位置が高くなるにつれて相手の山もだんだん高くなって見えるという当り前のことが非常に面白い現象として、何か人の世の生き方の一端を教えられた感じであった。私の山のスケッチは二の日から始まった。以後どの山行にもスケッチブックは私のお伴

をしている。五年程前私は信濃大町郊外から白馬連峰の残雪を描いた。私は妙に残雪の白の美しさに心ひかれる。いつの日にかあの白馬の雪渓の美しさを直かに肌で感じ取ることの出来る機会を希っていた。計らずも　こぶし山の会の白馬山行に参加させて頂き、豊重な三点のスケッチができたことを私は心から感謝しています。紺碧の空の美しさや、堂々たる雪渓の雄大さは私にとっては、肌で感じるなどという生やさしいものでなく、それは正に骨身にこたえたという感じであった。大げさにいえば民族の大移動のような力ラフルな大部隊の山行は、私には始めての経験であり、生涯のよい想い出となることでしょう。同行の皆さんの御厚意に心から感謝いたします。今、私は白馬でのスケッチや写真を参考に、三十号と、とりくんでおります。コックリズムの私のこと故、いつ描きおえるかわかりませんが、でき上ったら何かの機会に発表したいと考えております。おわりに、

上越こぶし山の会の発展と皆様の御健康を祈ります。

に発表したいと考えております。おわりに、

山行記録



1972年8月13日～17日　上高地－奥又白池－前穂－上高地

8月13日

急行で松本へ。さらに穂高町に住む学生時代の友人－青柳氏宅へ。ここは小生が北アルプスへ行く時のベースキャンプだ。当日青柳氏は残業でまだ帰っておらず　かわりにもう一人の同行者――やはり学生時代の友人――今関氏がいた。すでに青柳氏のおやじ殿はビールの用意をしており、丁度いい時に飛び込んだものだ。

10時すぎに青柳氏も帰宅。どれだけ飲んだかわからないが、1時すぎに就寝。

8月14日

9時起床。昨夜の酒のためかよく寝た。いや寝すぎた。バスで松本へ。駅前で食料飲物を購入。それからタクシーの交渉。四千円で妥結。運ちゃんは　せの子を一人乗せろとうるさいが、だれものせず3人だけで行くことにした。

ダム建設で道は良くなったものの、すご

い車の量。中の湯あたりから車がつまってしまいなかなかうごかない。釜トンの中で前にいた車がエンコ。横に寄せて前進。ものすごい疲気がス。

信州大学サマーテント（信大山岳部経営）のすぐ近くにテントサイトをみっけ、テントを張った。

夕食后、サマーテントにいる現役部員4人がきてビール5本、4合ビン2本、ブラックニッカ少々を飲んだ。いろいろ話をして寝たのがやっぱり1時。

8月15日

またも昨夜の酒で起きたら8時。メシを作って食べ終ったら10時。青柳氏、サマーテントへ行ったら現役に「今日は行くだかい」といわれた。ブジョクを感じる。O.Bのメンツにかけても絶対に行こう。

昨夜なとなりのテントの人から、カレーとミソとジャガイモと米とハイミーとツケモノとソーセージとお茶とラッキョウをもらってトマト2つやった。今朝は、となりのアベックから夕ゴを4ケもらった。とてもうれしかった。

10時半出発。明神で今関氏、サングラスをひろった。自分のを青柳氏に貸し、テメエはトンボメガネでいい気分。ヤツは上高地でも一円玉をひろった。

明神から右岸にわたり、新村橋へ。この橋は、数年前増水で流されたのが復旧したもの。ここからササヤブ。ヤブコギで手にキズをつけながら進んだ。ササヤブをぬけると、そこは白い目がまぶしいような輿又白沢だ。はるかかなたに雪渓がみえた。パノラマコースと分かれ、しばらく沢を進むと、テントが一つ張ってあった。沢をぬけ、山道にはいる。またヤブコギ。先頭にいる俺は、本当に大変だ。

20分もすると松高ルンゼの入口についた。水がとてもうまかった。松高ルンゼを左にみながら中畑新道を登る。トレーニング不足で

[illegible]ミソとジャガイモと米とハイミーとツケモノ

足が思うように進まない。ベニバナイチゴの実がうまかった。後ろの2人はにがかったらしい。松高ルンゼの上部で一休み。ここで食べたレモンのうまかったこと。すっぱさをとおりこして甘みを感じた。これは疲労の末期的症状だ。

すぐ上が台地状にみえ、ダケカンバが2本はえている。早くそこまで行こうと思いながらも足は進まず。10分ぐらい奮斗してやっと台地に出たら、そこには奥又白の池があった。ホッとしたというか、がッカりしたというか。

今日の晩メシはカレーだ。2杯たべた。うまかった。蝶ケ岳の上に出た積乱雲が、ダケカンバ越しに池に映え、とても美しかった。

今関氏がまたまたヒロイズムを発揮、千円札とナイフをヒロった。あいつは明日きっとよくないことがあるぞ。

[illegible]がとてもうまかった。松高ルンゼを左にみながら中畑新道を登る。トレーニング不足で

今、ウィスキーをくみかわし、ローソクの灯でこの日記をかいた。おやすみ。

しずかな夜ふけに、いつもいつも
想い出すのは、おまえのこと。
おやすみ、やすらかに、たどれ夢路
おやすみ、たのしく、こよいもまた。

(参考タイム) 上高地(10.30)—明神(11.00)—新村橋(11.45—12.00)
奥又白谷(13.00—13.20)—松高ルンゼ入口(13.50—14.15)—奥又白池(15.30)

8月16日

今日も2日よいかと思ったら、そうではなかった。5時半起床。前穂東壁がくらやみにそびえていた。テントを出てキジ山にのぼったら、富士山がとても美しかった。

今日の朝メシは大変まずかった。ナメコのミソ汁を作った中へタラコを入れてしまったのだ。それに東京の米のまずいこと。思わず口からとび出したほど。半分すててしまった。そのためか、最初ののぼりは胃の調子が悪くヘドがでそうだった。それでも無理して登っ

た。A沢入口までくると少しは良くなった。ここのガレ場はひどい、手足4本使ってよじのぼらなければならない。時々みえる前穂3峰フェースの偉容が心をなごませてくれる。

ガレ場の次は、A沢雪渓だ。出口がすぐそこにみえるが、いざ登ると長いし、急だ。ポリタンに水を半分しか入れてこなかったので残雪をつまみ食いしながら登る。太陽光線の熱さに雪で顔を洗った時の冴ともいえない気持。足下に奥穂白地が鏡のように輝っている。

A沢を登りきった所は、明神岳からの稜線だ。イワギキョウ、ミヤマシオガマ、イワウメなどが美しく咲き乱れている。新穂、御岳の展望を楽しみ、はるか下にみえる上高地をみながら頂上へ。岳沢からの道に合流すると急に人混みになってきた。頂上はますます荒れはてゴミと空カンの山。晴れわたった空とは対象的だった。

岳沢の下りは長くていやになる。すぐ下に岳沢小屋がみえるのだが、なかなかつかない。急坂が終るとお花畑だ。ホソバトリカブトの濃紫色があざやかだ。花の間をベニヒカゲとコヒオドシが飛びかう。

岳沢小屋で休憩。水ポリタン一杯20円也。今岡氏がバヤリースオレンジを買ってきた。何と一本180円。暴利。

ここからは樹林帯にはいる。ソガとカンバの林だ。小鳥も多い。すぐ近くまできて鳴いている。オオルリの声だ。

河のせせらぎが聞こえるようになると、すぐ岳沢入口だ。小川の水で体を洗い疲れをいやす。あとは平らな道だ。

上高地は下界。昼下がりの太陽の下を、色とりどりのファッションが行きかう。

今日は一日中晴れわたっていた。幸運な日だった。いずれまた来る日まで、さようなら。

(参考タイム) 奥穂白地(7.00)—A沢上部(8.30)—前穂(9.10-10.00)
—岳沢小屋(12.00)—岳沢入口(13.30)—上高地(14.00)

—記— 杉本敏宏

妙高山登山

清水精一

燕温泉の薬師堂のわきから登山道に入り北地獄谷を渡り少し登るとブナ林の中の急な坂が続き北地獄谷の河原に出る。河原に向って登り硫黄のにおいが鼻につくようになれば道は河原からはなれて急な斜面に入る。登りきった所が天狗平なのだ、天狗平は池の平、赤倉からの道が合する・妙高の頂上までは高低差約五〇〇メートルもあるのだクサリ場を過ぎて10分も登ると南に突き出た尾根に出て北アルプスの展望が開ける。妙高山の頂上は南北に細長くたどりついた南峰から一等三角点のある峰まで約十分位かかる。妙高をずらりとと巻く黒姫、飯綱、戸隠、焼、火打、雨飾の山々をま近に南北アルプス、八ッケ岳、浅間、上信越の山々を一望におさめてはるか日本海の荒波に浮ぶ佐渡も眺める事ができる下山の道は再び天狗堂へ戻って燕温泉へと下る。尚時間があれば薬師堂の下にある共同湯で汗を流すといいよ！

37才の火打

桑原 巌

俺が37才になったその日
火打の真白な斜面は
際限もない広がりを見せ
その頂は
白い広がりの果ての
青さの中に
とけこんでしまったように
はるかに遠い

その白い広がりの中で
俺はオドオドと立ちすくみ
足元をみだすのをためらい
吹きあげる寒風に

たったひとりの身をさらす

白さと青さが
俺の眼の中に
するどく突きささり
俺の胸のどこかで
きりきりと
痛みが音をたてる

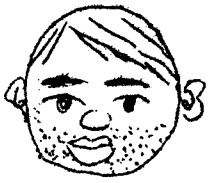
俺は今37才
かって、
いつ、どこの山でも
俺は自分の年令の重みを
感じはしなかったのに
たったひとりの思いが
今俺の心をさいなむ

遠い昔
たったひとりで
二月のマチが汐の層の斜面で

その白さの中に
この身を埋めてしまいたい
そんな思いにかられた日のことが
あざかによみがえる。

えい！
30男の感傷なんて
犬にでも喰わせてしまえ！

しかし
やはり俺は白い広がりの中に
たちすくみ
その頂にむかって
足をふみだすことをためらう。
一九七二、十一、三、



鹿島槍～爺ヶ岳縦走　（前夜発・1泊2日）

メンバー「木島・古木・小倉」

大糸線信濃大町駅前からタクシーを走らせて大谷原につく、ここから平坦な車道を大冷沢上流に向かって行くと昭和電工の取水口手前から大冷沢を高まきして森林帯を進むと西俣と北俣本谷の合流点西俣出合につく、丸木橋を渡って赤岩尾根の取り付点である。

赤岩尾根の登りは急斜面と森林帯の中をダンダン登り高度をかせぐが、あまり視界がひらけない登りである。

高千穂平付近からハイマツ帯となってしばらく登って行くと高台に出る、ここが高千穂平だ。ここでひと息を入れ周囲の展望が素晴らしいところだ、鹿島槍南峰から北峰の吊尾根、雪渓、岩壁が目の前に、爺ヶ岳の奥穂などが素晴らしく見えるところである。

高千穂平からやせた尾根をしばらく登って行くと赤岩を乗り越えて登り切ると冷乗越に出ると、後立山縦走路と合流する。

ここから少し下りで冷池小屋につく、さらにキャンプ指定地まで約20分ほどの登りで稜線上のキャンプ指定地につく、今日はここでテントを張る。

キャンプ場を後にして、鹿島槍めざして出発高山植物の咲く稜線の縦走路をジグザグの斜面を登り切ると布引岳、ここから先はゆるい登りで鹿島槍南峰頂上だ、展望が素晴らしい遠く南、中央アルプス、槍穂連峰、五竜、唐松、白馬三山、剣立山連峰、妙高、火打、焼山の山々が見え大パノラマだった。

キャンプ地、鹿島槍を後にして、縦走路を爺ヶ岳へと向かう。爺ヶ岳は北峰、本峰、南峰となっているが頂上へ登れるのは南峰だけだ、頂上からの展望も素晴らしい、正面に剣岳が見える。

爺ヶ岳南峰から稜線を下って赤い屋根の種池小屋につく、ここから扇沢へと雨の中を下山する。

コース・タイム　鹿島槍・爺ヶ岳縦走

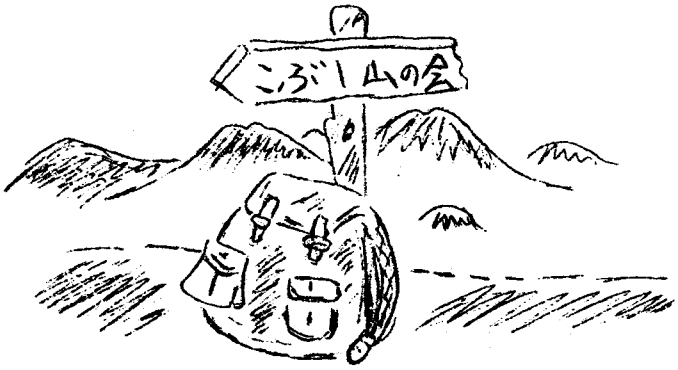
扇沢　着 13:30

(7月28日)

大谷原	発	6:00
面俣出合	着	7:10
	発	7:40
高千穂平	着	11:00
	発	11:40
冷池小屋	着	13:40
	発	13:50
キャンプ地	着	14:10

(7月29日)

キャンプ地	発	5:15
鹿島槍	着	6:30
	発	7:00
冷池小屋	着	8:10
	発	8:30
爺ヶ岳	着	10:05
	発	10:30
種池小屋	着	10:50
	発	11:20



詩　自分

T.O

なにもーない自分
いっもくりかえーの自分
そーて期間がすぎてゆくのです。
だれかと拘束することもない
自由である。
自由であるがゆえに
何もできない
それが自分の弱さなんです。
そこには
何もありませんか。

蝶、常念、槍ケ岳縦走　　木島　忠彦

一九七三・八・十二～十五

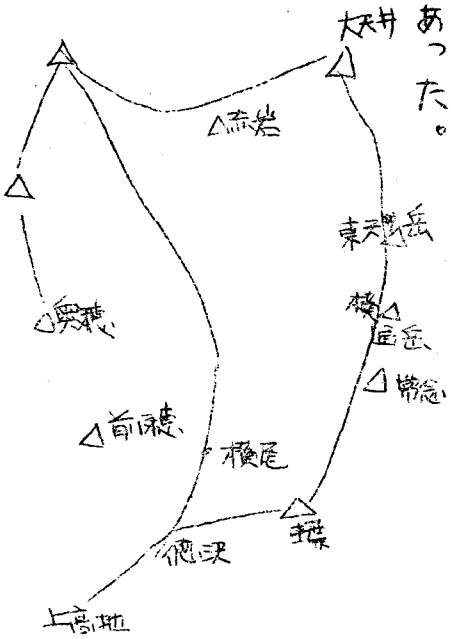
一年に何回もない旧盆の連休に休暇をアラスしやっと行けた北アルプス。

連日天候がよく、全身でアルプスの影観を満喫出来た。

しかし身体の不調により穂高連峰に足をのばす計画を断念せざるを得なかった事は残念であった。

しかし下山のむつかしさ、身体のコンディション作りの大切さ等貴重な経験をし、有意義な山行であった。

概念図



8月12日　午前2時30分上高地到着。松本より上高地迄はタクシー利用。タクシー料金が一昨日より値上げで、予定より30%もオーバーしてしまう。

上高地にて仮眠。6時出発、空は抜けるように真高だ、そして梓川の水も青く美くしく澄んでいる。相変らず上高地から徳沢園までは、人、人、人である。

8時50分着、黄のテント場と人混みを右に、長塀山に向う。ジグザグの林の中でほとんど展望がきかない。以外と頭の中で考えているよりは長い。13時30分長塀山の頂上に出る。そこは10帖四方位な小さな広場で穂高連峰の雄大が目前に見えて休憩の場所としてはもってこいの所がある。ここからはほぼ平担な道を歩き蝶ケ池のテント場に16時到着。テント場では、先に着いた者がテントを張り終った所である。周りにはテントが15張り程ある。天気は非常に良く星が多い。小屋の方ではまだ食事にありつけない人達が、がやがやし

ている。
テントから出ると、山は黒く大きくカイ物の様に横たわっている。又下界には街の灯がまぶしく光っている。昼には街の灯が美しく見える。20時30分食堂男女共に入る。

8月13日　4時30分起床。今日も快晴だ。朝食を済ませ6時槍ヶ岳に向う。左手に穂高連峰を見ながらゆるい登りをゆっくり行くと、もうそこは槍ヶ岳の頂である。時計を見ると時分である。
梓川の深い谷の向こうに大きくレットを中心に左に北穂、涸沢、前穂、右手に奥穂、中岳、大喰、槍ヶ岳と大展望がきく。又これから進もうとする方向には草木のない岩場の常念岳が手に取るように見える。ここからはせっかく登ったのにまだ下るのかと、思う程グングン下る。しかし比較的歩き易く、変化に富んだ道であきのこないコースである。さていよいよ常念岳への登りである。急で長い・一歩一歩ガラ場を登る。他のパーティに抜いたり抜かれたりしながら11時30分頂上に立つ。頂上より見る槍ヶ岳は近くて大きい。今朝出発した場所は遠くに見える。その反対側にはこれから行こうとする道が長く、遠く、天天井を経て槍ヶ岳までグーと見える。遠いようでも又近いようでもある。頂上で食べたレモンは疲れを解消してくれた。12時下に見えている赤い屋根の常念小屋までいっきに下る。急な下りである。登ってくる人も足が重い。八合目千前100m位三角点ハハ三連れの鹿島に出合う。人が近ずいても逃げようとしない。皆なカテャ、――とシャッターをきる。13時30分小屋着。昼食は皆なはミ、四枚の食パンを2ロット平げているのにどうも食が進まない。14時00分出発。小屋の上にあるコマクサを見る。何もないこんなガラ場によくもこんな立派な花を咲かせているものだ。花が顔を寄せ合い自然の厳しさに耐えているようだ。

ゆっくりかも確実に登っている。喘ぎながら歩く。尾根の左側を登り下りしながら進む。結構長い。途中残雪でジュースを作って飲む。ほともうまい。最后の残雪を過ぎると もう彼方に大天荘が見える。今日の宿場である。17時10分到着。テント場は相変らず混雑している。ここのトイレの立派な清潔の行き届いているのには感心した。今日も無事天敗(?)の無い食事にありつけた。

ここから見る槍、穂高は、崇厳感で見たよりだいぶ遠くに、穂先だけが見える。

8月14日 4時起床、晴れ。

朝食を済ませ6時30分出発。大天荘の左側を一気に下る。右手に大天井荘、左手には二ノ俣谷が深く落ちこんでいる。途中から見る、喜作新道をモクモクと人の歩くのが見える。大天井ピュッ、着7時。ここから表銀座コースに入る。槍穂が一時見えなくなり、明るい登りをゆく。振り返ると走樂岳出現した大天井荘が高くそびえている。その小さな登りをつめると大きくひらけ。彼方に槍が大きくのしかかって見える。北鎌尾根のゴツゴツした山が見える。ここからの尾根道は歩き易い。

9時40分ピュッ、千丈荘に到着。水不足で水も余り買えない。裏東尾根は急登で長い。水俣の乗越までは、相当急な下りだ。左手には槍沢が深く落ちこんでいる。槍の頂上から槍沢の下の雪渓まで見える。やはり大きい。雪渓の上を列を作り、下るアリ、登るアリが見える。これから登る東尾根は、長く急なのに小屋を出てからグンニー水俣乗越まで下る。

11時水俣乗越到着。左手に槍沢へ下る道がある。そこに入り昼食をとる。12時出発。

さてここからは急登の連続である。ハシゴあり、ガラ場あり、又ハシゴありの連続である。しかし足場はしっかりしているので注意して行くと、危険はない。13時50分ピュッ千天槍に着く。槍はもうそこだ！ここからも急登だ。左手に槍沢、眼下には殺生小屋、

右手には、赤い天上沢、前方には槍がのしかかってくる。ハシゴを駆けるともう肩の小屋はそこだ。槍の穂先の真下まできた、あとひとふんばり。肩にも穂先にもんが多い。[illegible]時[illegible]分肩に到着。テント場は岩と岩の間のせまい場所、寝相が悪ければ槍沢に落ちそうだ。テントを張っているうちにガスがかってきて槍の穂先が見えたり、かくれたりしている。登頂は明朝とする。食事を済ませて、テントの中で討議する。初日から連日好調が悪いのと天候が下り坂で明日より、計画通り穂高縦走をするか否かの討議だ。その中で、いかに下山する事が難かしいかを、知らされた。しかし最終的には、下山と決定する。いざ下山と決定すると、何か残念で、なかなかその夜は眠られなかった。

8月15日　4時起床、晴れ、明日、頂上に向う。もう頂上への登りは人の列である。まだ暗い岩場をゴソゴソと歩く。

狭い頂上はやっと居られる程混雑している。5時10分東の空から光が差し始める。シャッター音がうるさく聞える。360度展望がきく。東に向いて右手前方より富士、常念、蝶。左手前方には新潟県の名峰妙高、火打、焼が見える。西を向いて右手に裏銀座コースが遠く　見える。7月に皆なで登った白馬も見える。何とも美しい。左手には昨夜あきらめた北穂沢、奥穂、前穂及び北尾根の山魂が手に取るように見える。さすが槍の穂先だ！。何か遠方に槍ヶ岳が見えないのが変だと思えるくらいだ(?)。

6時30分テント場に下る。朝食はゆっくり取る。8時30分槍を后に槍沢を下る。登りは大変なのに下りは楽だ。グングン下る。途中手の切れるような水で久方振りに顔を洗う。何とも云えないすがすがしい気分だ。雪渓の上で[illegible]記念撮影。全員の顔をカメラに収め上高地をめざし、帰路につく。

以上

花ことば

花になんらかの意味を持たせ、さまざまな象徴として用いるもの。植物は古代からいろいろな表象（emblem）に用いられてきたが、花ことばによる贈り物や遊びの風習がいつごろはじまったかは明らかではない。ペルシア、アラビアの風習をまねたという説、モンタギュー夫人（一六八九～一七六二）がイギリスへ伝えたという説などがあるがいちじるしく流行したのは19世紀後半からである。とくに花ことばのために考えだされた意味には、伝説歴史、花名性質などがもとになったわかりにくいものが多い。一般には春先の花には「希望、幸福」を意味するものが多く、秋の花には「過ぎ去った喜び、追憶」といった意味を持たせたものが多い。

花ことば（高山植物）

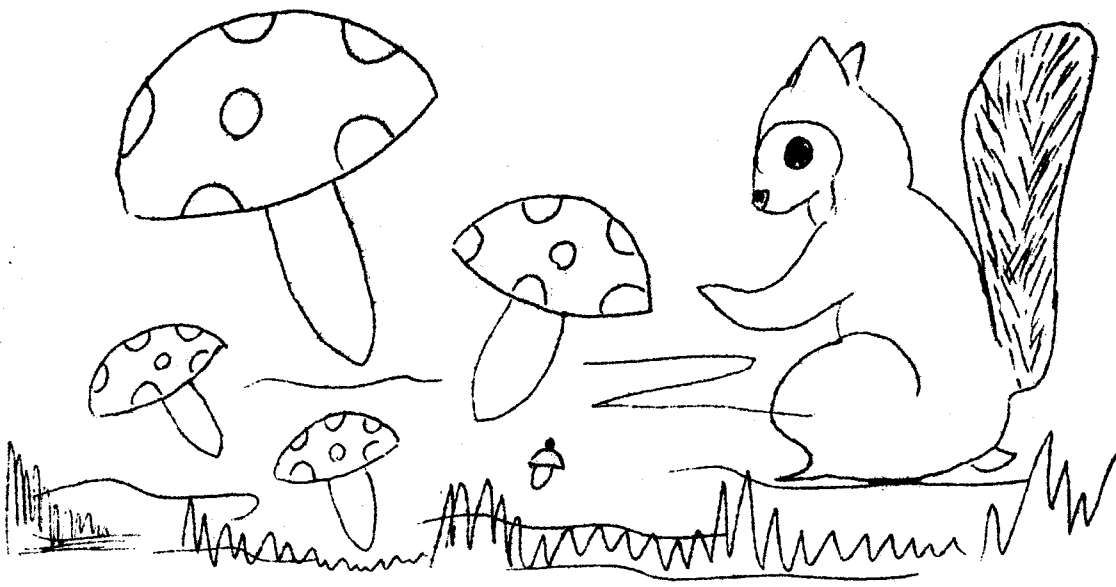
コマクサ（けし科）	誇り
クロユリ（ゆり科）	君に捧げる
チングマギキョウ（ききょう科）	変らぬ心
ニッコウキスゲ（ゆり科）	情熱
アズマシャクナゲ（つつじ科）	祈り
タカネツメクサ（なでしこ科）	約束
ミヤマセンキュウ（せり科）	繊細
ミヤマアズマギク（きく科）	上品、気品

（植物の本より）

山に想う

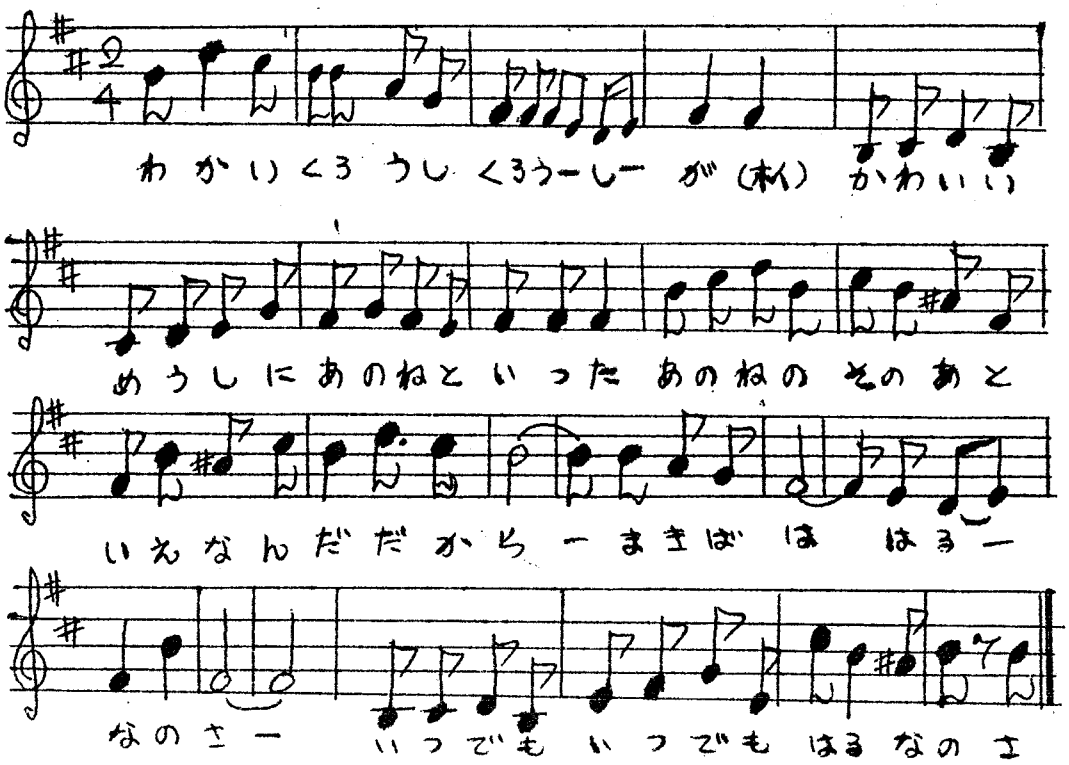
大きなゴツゴツした岩の間を
白いしぶきを飛ばし
音を立てて流れていく……
汗をふきふき
ニギリメシをほおばる
「うまい！！」
岩の横に静かに咲く
黄色い小さな花
ふと
仲間のめと自分のめが
ニッコリうなづく
山にきてよかったなあと感ずる

―芳沢善之男―



青春牧場

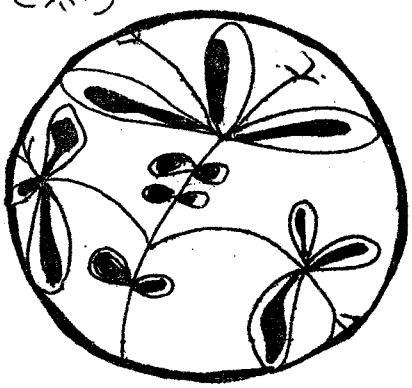
サトウハチロー詞
木下忠司曲



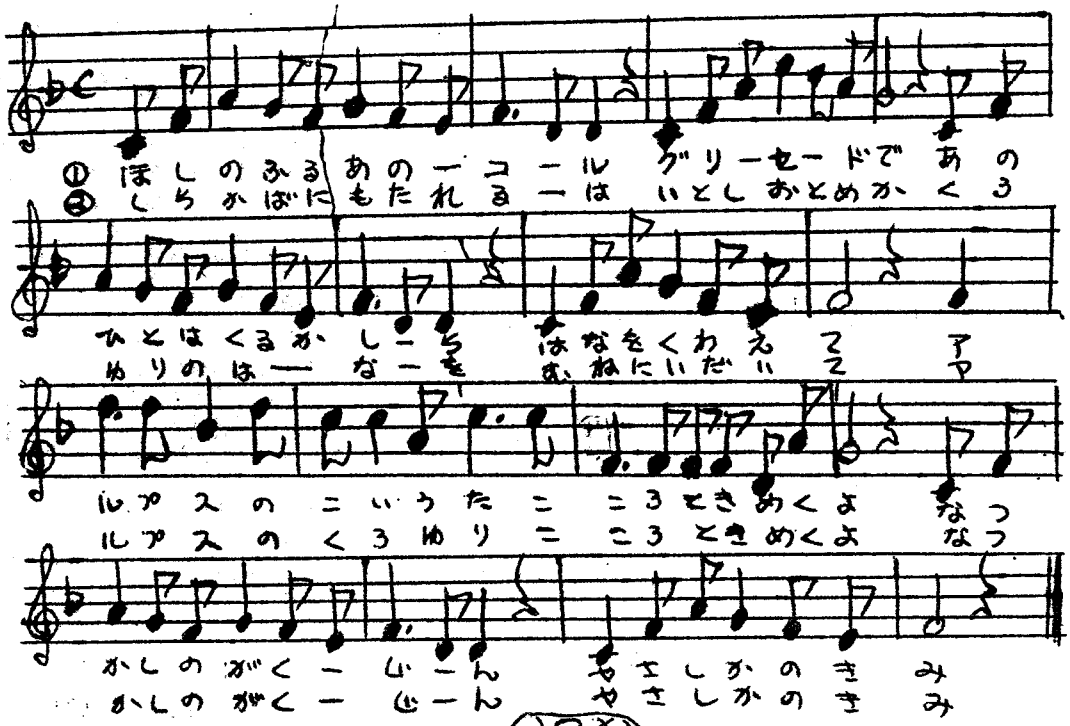
② つのがぬれたか 朝つゆに（ホイ）大きな瞳も光ってぬれた
どうしてぬれたかしらなんだ（1番と同じ 必い）

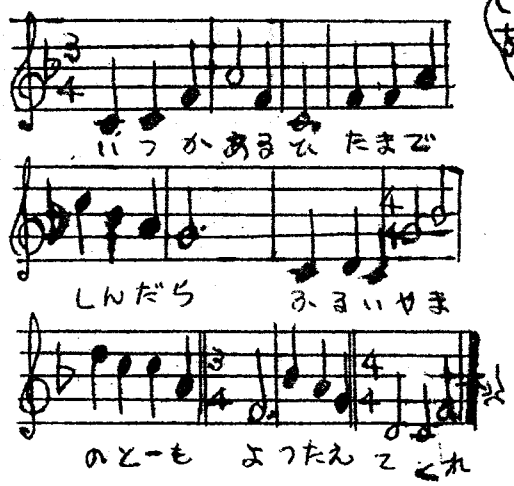
③ 遠い山々峰の雲（ホイ）空さえ毎日若くて青い
風さえ強くは吹かなんだ（必い）

④ 若い黒牛 黒牛が 今夜も三日月だまってみてる
三日月なんとも言えなんだ（必い）



岳人のうた





いつかある日

② 母親には 強かだったと
男らしく死んだと 父親には

③ 伝えてくれ いとしい妻に
俺が帰らなくとも 生きて行けと

④ 息子たちに 俺の踏跡が
故郷の岩山に 残っていると

⑤ 友よ山に 小さなケルンを
積んで墓にしてくれ ピッケル立てて

⑥ 俺のケルン 美しいフェイスに 朝の陽が輝く 広いテラス

⑦ 友に贈る 俺のハンマー ヒットンの歌う声を 聞かせてくれ

こぶし山の会
過去一年間の山行記録

一九七二年

六月十八日　戸隠裏山　十二名
七月十六日　長助池～鬼沢　五名
八月五～六日　奥穂高（大衆山行）三五名
十月一日　乗鞍山　十七名
十一月三日　火打山　中止
十二月十六日～十七日　妙高山　七名
十二月三十一日～一月二日　神無山（火打）四名

一九七三年

一月二十八日　妙高山（降雪のため七名まで）中止
二月二十五日　大毛無
三月十八日　木山　六名
四月十五日　まだら尾山　五名
四月二十二日　ほこが岳　四名
五月十三日　菱ケ岳　五名
六月二～三日　尾瀬沼　十五名
七月十五日　白馬岳（大衆山行）八十九名
八月五日　菱ケ岳キャンプ　七名
九月二十三日　権現～ほこが岳　四名
十月七日　明星山　中止
大糸線木崎湖方面へ

会員名簿

荒井　昭作
○池田　洋子　上越市東本町二丁目七二
○梅野　昭諦　上越市東雲町二丁目
大島　美昭　上越市えびす浜三〇一　Ⓣ43-0834

古木　博明　上越市西城の木九六九　㊟3668
小倉　泰治　上越市大字飯八九八-二
桑原　巌　上越市仲町六丁目建設省官舎
木島　忠彦　中頸城郡大潟町
技術浜　Ⓣ大潟3257

○八木　真理子　上越市七ケ所二三-一　㊟7285
金子　よし子　上越市上稲井二六九-一　㊟6944

嶋田　五郎　上越市東雲町　Ⓣ8447
○横田　彰　東頸城郡浦川原村宝川
○松岡　健一　上越市西城町四丁目一一-七
○清水　猪一　上越市木田　Ⓣ

入村　晶子　上越市本町三丁目二-一九　Ⓣ二三-23-4822
○本　敏宏　上越市東本町五の一の三八
○田中　進　中頸城郡大潟町潟町五区　Ⓣ24-3787
朝風荘内
○田中　かり子　Ⓣ大潟7424
芳沢　喜久男
○山崎　昭雄　建設省内

（山歩き用語）

あたま（頭）
谷や沢の源頭部にあたる尾根筋に顕著な隆起をなしているところ。丹沢ミツ峰の本間ノ頭，谷川岳のオジカ沢の頭など。「かしら」と読む土地もある。

アプローチ
接近することだが，最後の交通機関と別れてから山のふもとまでのあいだをさす場合に使われる。アプローチが長い，短かいといったぐあい。

あんぶ（鞍部）
峰と峰とを結ぶ尾根のいちばん低くなったところ。したがって峠は原則として鞍部にあたることになる。

うがん・さがん（右岸・左岸）
川の上流から下流をみて右が右岸，左が左岸。だから沢登りのときは遡行が逆になる。滝の右岸を登るというときは向かって左側を登るわけである。

うまのせ（馬の背）
左右が切れ落ちている尾根や山稜。文字どおり馬の背状になったところ。

かた（肩）
山の頂上近く，ちょうど人間の肩のように平になっているところ。槍の肩といったぐあい。

からむ
山の斜面を尾根やピークに出ずに横に伝ってゆくこと。「まく」と同義で，そのほうが一般的。

がれ
斜面に流れるように岩屑などが堆積しているところ。沢筋のつめの部分などに多い。

カール
氷河の浸食作用によってできた谷。おわんを縦に割ったような形で，穂高の涸沢や剣岳の剣沢などが代表的。

キレット
かたかなで書くことが多いので外国語とまちがわれるが、本来日本語らしい。切戸と書くこともある。山稜が急峻に深く切れ落ちているところ。北アルプス鹿島槍北方のキレット，槍穂連峰の大キレットなどが有名。

ケルン
英語ならケアンと発音するのが正しく、仏語ならケルン。英語式発音は日本の山では通じない。石を積みあげて道標や記念としたもの。

こぶ
文字どうり山稜上にこぶのようになっている凸起。

ごらいこう（御来光）
山頂またはその近くで日の出を拝むこと。ごらいごう「御来迎」はブロッケン現象を宗教登山者がよぶときのものでまったく別。

コル
鞍部，峠のこと。

さんかくてん（三角点）
地形調査の基本となる測量点の一つ。山頂や見晴しのよい山稜上に長方形の花崗岩を埋めてある。三角点といっても三角ではない。標字の書いてある側面が原則として南を指す。

スラブ
かんなをかけた板のようになめらかな岩。谷川岳一ノ倉沢のエボシのスラブ，滝沢スラブなど。

せっけい（雪渓）
夏でも雪で埋められている谷や沢筋。白馬大雪渓が有名。

たかまき（高巻き）
沢や谷を登るとき，滝や淵を迂回して両岸の山腹ににげて行くこと。

であい（出合）
二つ以上の沢や川が合流しているところ。

のっこし（乗越）
峠と同じ意味だが，峠ほど一般人の通行しないところや単に山稜を乗り越せるところの意味に使われることが多い。

ビバーク
小屋やテントなどの設備なしで夜をすごすこと。

また（股・俣・又）
いずれも二本以上の沢や流れが合流しているところ。
転じて固有の地名になっているところが多い。
さらに二つに分れている沢を下流からみて、右俣、左俣とよぶこともある。

りんどう（林道）
木材切り出しなどの為に切り開いた道、多くはトラックが通れる程道のものをいう。

一部をのぞき山小屋の食事は、（たとえ出してくれたところでも）オンマツそのもの。副食品を用意したほうがよい。

ぬれて小屋についたら、身体の暖いうちに着替えたほうがよい。

生存競争がはげし 特には、フトンのそばにいるのがよい。

軍だななどでは自分の持ちものをたえず確認する。名札をつける位の慎重さがほしい。

夕食は順番まちの小屋も、朝食は先順のところがほとんどなので時間をきいておくとよい。

小屋のアルバイトはコースのことはよく知らない。
むしろ反対方向から来た人に、あるいは本当の山小屋の主人にきくこと。

ぬたフトンの中でサイフを落した人がいる。
起きたら一応フトンをたたんでみるとよい

追伸

白馬登山に参加して

佐藤 務

山に行きたし、金はなし、仲間なし、―。山や海のシーズンが来るたびに、思案している人達が多くいます。

そんな私達にかっこうの登山を計画してくれた、「こぶし山の会」の仲間に感謝します。

「一人ぼっちも大歓迎」の安くて楽しい、「安全」な登山を、今後も是非計画して下さい。

私の職場では、組合が分裂してからは、以前の様に気楽に仲間が集ることは、できません。山キチが組合が違うと言うだけで、一緒に山に行けない様な、暗い職場はもうごめんです。

白馬に登ったあの日、大雪けいを、おそちく生まれて初めてのアイゼンを付けて、仲間がおしはげましあいながら、頂上に向った三十人程の老人グループに抜えられることの多いことでした。

「お国のため」や「大会社のため」に毎日汗を流して働くばかりでは、「健康で文化的な生活……」が可哀想です。

資本家や観光業者の自然破壊による開発を、山の仲間は認めることはできません。

楽しい職場を作るために、次の世代に豊かな自然を残すために、仲間が集って、自分の仕事や、生活を考え、話し合うことが、必要だと思います。

「こぶし山の会」の今後の発展と仲間の健康を祈ります。

あとがき

こぶし発刊にあたりましては、皆様のご協力ありがとうございました。

皆んなで、山行記録でも、感想文でもよいから機関誌を出そうではないかと、話しが出てから、もはや一年を過ぎてしまい、申しわけなく思っております。

これが機関誌かは、わかりませんが、これからも出来る事ならば定期的に、この様な形式のものを出して行きたいと思っております。

その時には、又いろいろとご協力の程をお願い致します。

不慣れな為難読の点も多い事と思いますが、お許し下さい。次号までには、少し勉強しておきます。

古木 博明

1973.10.30